

外国語活動・外国語科

榎原 朱梨・森澤 葉子・伊藤 美絵

1 外国語活動・外国語科の基本的な考え方

外国語活動・外国語科は、言語を学び、コミュニケーションを図る教科・領域である。情報化に伴い、あらゆる情報に自ら触れることが容易な現在において、英語という世界で広く使用される言語の運用能力を獲得していることは、多様な媒体の情報を自分のものとして獲得していくときに、日本語で発信されたものだけに限らないさまざまな情報を得て、多様な価値観や視点を理解するとともに、情報を取捨選択しながら生きていく力を身に付けることにつながる。自分の母語ではない別の言語を学ぶという外国語教育の目的として、欧州評議会によって作成された「ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: CEFR）」では、「学習者の人格やアイデンティティを育むこと」（Council of Europe, 2001, p.1）であると述べている。そして、異なる言語への理解を深めるということが、異なる母語をもつ人々とのコミュニケーションや交流に繋がるとともに、移動の自由や相互理解、協力を促進し、偏見や差別を克服するための契機となることが示されている。言語を学ぶということは、単に言語運用能力を獲得するだけでなく、その背後にある文化や人々のものの見方や考え方を理解することにつながるということである。また、同時に、第二言語を学ぶということは、母語である日本語やその文化を相対的に見つめ直す機会にもなる。これまで無意識に使ってきた言葉や考え方を客観的に捉え直すきっかけになる。つまり、他言語を学ぶことによって、自らの言語や文化に新たな視点から向き合うことができるようになると言える。このように、外国語活動・外国語科には、言語を習得する過程の中で、自分自身の常識や価値観を一度立ち止まって見直す機会が多くあり、そのような機会は、他者との違いを受け止め、尊重したり、異なる文化や価値観を楽しんだりするという共生社会に必要な態度を育むうえで、重要な役割を果たすと考える。

さらに、小学校及び中学校における外国語教育においては、児童・生徒の発達段階に応じて少しずつ表現を変えているものの、「コミュニケーションを図る（基礎となる・素地となる）資質・能力を育成すること」を目指している。外国語活動や外国語科の活動の一つとして、児童・生徒同士でのやりとりが多くある。同じクラスの友達であったとしても、自分とは異なる価値観や考え方をもっている。コミュニケーションを図ることが基盤にある教科・領域だからこそ、さまざまな話題についてあえて英語でやりとりを行うことで、新たな発見や考え方に出会うとともに、自他の違いや共通点、またそれぞれのよさや課題等を踏まえて、自分にどう生かしていくかを考えることができると言える。さらに、言語は人との関わりの中で用いられるため、他者を尊重し、コミュニケーションの相手を配慮しながらコミュニケーションを図ることが求められる（文部科学省、2020）。コミュニケーションの相手は、身近な友達だけに留まらず、学習段階や学習内容に応じて少しずつ広がっていく。コミュニケーションの相手が広がれば、コミュニケーションの際に求められる他者への配慮も変化していく。コミュニケーションを行う目的や場面、相手との関係性などを踏まえたコミュニケーションの在り方を検討することは、お互いの立場や考え方を配慮し受け入れる寛容さや、調和を図る態度に繋がっていくと考える。さらに、相手の理解を確かめながら話したり、相手の言ったことを共感的に受け止める言葉を返ししながら聞いたりするなどコミュニケーションを図る上での態度についても、英語でのコミュニケーションにおいては自然と目を向けることができる。そのことは結果的に母語をも含めた他者意識のあるコミュニケーションに繋がっていくと考える。

このように、外国語活動・外国語科では、言語の習得に留まらず、言語そのものやその背景にある文化や人々の考え方への理解を深めるとともに、コミュニケーションを通して他者理解を促し、出会った

多様な価値観や考え方をもとに自分のアイデンティティへの理解を深めていくことができる。また、他者への理解が深まることは、共に生きていくためにはどのような他者への配慮が求められるのかを考えることに繋がっていくと言える。これらのことは、共に生きる上で欠かせないものであり、外国語活動・外国語科を通して児童生徒が身に付けていくことができるものである。

以上のことを踏まえ、共に生きることを学ぶための外国語科においてめざす子ども像を「自他のアイデンティティを理解し、違いを楽しむとともに、英語でのコミュニケーションを通して、相手の意見や感情に配慮しつつ、自らの考えを的確に伝え、相互理解と協力的な関係性を構築できる子ども」と設定した。さらに、目指す子ども像に向け、必要だと想定される外国語活動・外国語科の授業づくりの視点を表1に示す。

表1 外国語科におけるめざす子ども像及び授業づくりの特徴

外国語科でめざす子供の姿	外国語科の授業づくりの特徴
英語でのコミュニケーションを通して、自他を理解し、協力的な関係を構築できる子供	・自分事として捉えられるような場面設定 ・多様な考え方に出会い、自分の考えを表現する場面 ・違いを楽しむことができるような場面設定

2 研究の目的

自他を尊重し、共に高め合う子供の育成を目指して、外国語科における共に生きるための外国語科の授業づくりの在り方について検討することを目的とする。

3 研究の方法

外国語科の授業づくりの特徴をもとに、小学校・中学校それぞれの段階において、めざす子供の姿に向けた授業を構想し、実践する。また、授業における児童・生徒の姿やワークシート等をもとに、共に生きるための外国語科の授業の在り方への知見を得る。

【引用・参考文献】

Council of Europe (2001). Common European Framework of Reference for Languages. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

文部科学省(2017). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語』

文部科学省(2020). 『中学校学習指導要領解説 外国語』